

復活節集会

復活の歓喜と希望

1992年4月19日（京都）

奥田 昌道

主に委ねる 賜った恵み 復活節が本当の新年 三日めに甦る 「マリヤよ」「ラボニー」 ト
マスに現れて下さったキリスト エマオ途上のキリスト 「死」は死ではない 主と共に十字
架された 生命を与えるご復活 聖霊 毎日が新生

●主に委ねる

復活節おめでとうございます。どうも、3月、4月と気候が不順で、東京の方でも体調をくずしたりしていらつしやる方が多いようです。私も軽い風邪の具合がまだすっきり抜けきれません。

今、錦織兄からお話しの出ていました小池先生、このお方は自称化物（ばけもの）ということでした、最近の手紙にこんなことが書かれている。

「3月は極めて不順な天候、4月もまだ不安定、健康を害している人少なからず、集会も今、半減の状況。どうしてみんな風邪を引くのだろう。私は何ともないので困った化物です。『主さま』と祈り入ると、この一言で私は火のようになるので風邪が逃げて行きます。」

これは本当なのです。先生は合掌して一言祈られると本当に体全体が火のように熱くなると、前から言っておられますが、内に熱があれば、外なる熱は熱も風邪も全部どこかに吹っ飛んでしまいます。もつとも先生は、一昨年ぐらいに一回、少しひどい風邪であられたことを私はよく知っております（笑）。だから人間救われるのですが。けれども88才の方がこんな憎たらしいことを言っている。今年の「エン・クリスト」50号（1992年4月）に、2月23日の富士山麓での元気なお姿の写真が掲載されています。

「一言、『主さま！』と祈れば自分はもう火となる。もう自分ではない。主が本当に生命いのちづいて下さる。だから、自分はもう、空中に飛んでいくような思いがする」

と、よくおっしゃいます。私のところにおいでになつても重い荷物を担いでおられる。少し荷物を持たせて下さいと言うと、

「いや、これで押えてないと空に飛んで行くから」

と言って荷物を持たせてくれない（笑）。そこまで痩せ我慢をしなくても良いのと思うけれど、あれは本当にそうなのです。それから、肩がこらないと言われる。何故かという軟体動物みたいにもいつも力が抜けている。私と錦織兄はどこかに力が入っている。だから



ら肩がこる。よく似ている。しかし、この化物なる方にはかなわない。全身の力が抜けている。ということは、本当にもう全部、主さまにあずけっぱなしなのです。我々は何かというところやはりここは踏ん張り所だと、知らず知らずのうちに責任感となっている。本当に全部委ねて、絶えず水が新しく流れていくように、こだわりなくあれたらいいのですけれども。

●賜った恵み

「復活の歓喜^{よろこび}」という。これは何だろうなあとありますが。我々はいつも、変な過去を引つさげて歩いている。遠い過去もあれば、昨日という過去もある。ついさっきという過去もあります。払い去りたい、おさらばしたい過去が亡霊のごとく我々を捕まえて苦しめるという、現実があります。逃れようとしても逃れられないがんだめの現実があります。まさに我々の生活そのものがそれにがっちり捕えられて、いくら上を望んでも脱出できない。

38年間病気で苦しんでいた人は——「天使が降りてくる池の中に入れば癒される」というが——動けない。いつも他の人が先に池に入ってしまう。そして、38年間、池のほとりで絶望感の中に空しく時を過ごしていたという話が、ヨハネ伝第5章にあります。彼は物心ついて成人して、38年間病気でした。その彼が瞬時にして

「床^{とこ}をとりあげて歩め」

と、キリストのみことばで癒^{いや}されました。あれはもう、復活の一つの徴^{しるし}ですね。

即ち、私たちにとつてこの主の「復活」と聖書で表されている復活というのは、飛躍なのです。連続ではない。断絶なのです。断絶して別次元に変貌させられる。それを瞬間に味わわせていただける。これは恵みなのです。本当にこれは恵みです。我々が自分でもがいてもできっこない。どんなにもがいてもなれっこない、その事態を主さまが、

「あげるよ、今あげるよ」

とおっしゃっています。

「はいっ」

という魂にそれがくる。本当に単純に「はい」と言つて受けとる、これが幼子の魂であります。

「汝^{ひるが}ら翻^{おさな}えりて幼子のごとくならずば、神の国に入ることあたわず、神の国を受^うくることあたわず」（マタイ18・3）

という。どんな大学者であろうと神学者であろうと、この単純さで主さまを「はい」と受けとるかどうかなのです。何も知らない無学の人間が、「はい」と言つて復活の事態の中に現実に入ってしまう。

長年、38年間勉強を積み重ねてきた学者であっても、「はい」ができれば、復活は彼方の望まれたる憧れにすぎません。単なるロマンチックな憧れの世界においておくのか、



自分が現に今、その中を歩いて行くのか、これが決定的な違いなのです。福音はすべての人に、一人ひとりの魂に差し出されている。その人がよく勉強してきた人か、立派な行いを積み重ねてきた人か、そういうことは関係がないのです。

実はこれは不公平なのです。よく勉強したことが何かだと思っている人は、勉強もしていない人がこんなに簡単に天国に入ると、

「これは神様、私は我慢できません。あんな怠け者がずっと入る。そんなのはとても我慢ができません」

と、きつと言うでしょうね。けれども神様の御旨^{みむね}は違うのです。

「人間はみんな一緒だ、神様の目から見たらみんな一緒だ」

と、おっしゃっています。

変貌してそこから本当に始まるのです。変貌して新しい人になって、神様の仕事が始まる。それまでやっているのは、まあ、準備にすぎません。準備がなければ次へ進めない人もあります。しかし、神様の与え給う生命というのは、我々の側で

「これだけのことをしたから、あなたのご復活を戴く資格があります」

と、その資格を言わさないのです。人間の側で

「私はこれだけの資格がありますから、どうぞ、復活の生命を下さい」

と、資格を主張することを許さないので。そんなものと引き換えにはならない。これはただ「恵み」というほかはありません。

「恵み」というのは、それに値しない者にただで与えられるものが恵みなのです。値する者に与えられるのは「報酬」といいます。

「罪の支払う報酬は死である」

という。こちらは、我々はみんな有資格者です。自分に罪がないと誰も言えません。神様の御意^{みこころ}を無視して生きることが罪ですから、こちらの死の方は、我々はみんな有資格者です。どんな人も有資格者です。

けれども、真の生命、本当の生命、こちらの方は誰も資格がありません。だから、恵みなのです。無条件の恵みなんです。そして、その恵みに本当にあずかった人が、

「これはもつたいたない。値しない者がこんなものを戴いてどうやって御恩返しをいたしましょうか」

と。仏教でもよく報恩といっていますね。

恵みに非常に感謝して、自分に新しく賜った生命、またこの地上の余生、それを神様に捧げていく。これが我々、クリスチャンとしての人生なのです。ですから、我々の日常生活で日毎に私たちは、古き自分に死んで新しく復活の主の生命に生きているという現実を、日々に戴いていくということ。これは本当に有りがたいことです。



●復活節が本当の新年

今日は聖書を二か所読んでいただきました。どちらにも出ていますことは、朝まだき、暗きうちにといいところから、一週の初めの日、つまり新しい日が始まる。長い夜がありました。その夜が終わりを告げて、日が昇ろうとしている。光が見えようとしている。その始まりに待ち兼ねたように「マグダラのマリヤは墓に行った」。ルカ伝では、「女たちが墓に行ってみた」とあります。記事が若干食い違っていますが、食い違っている点も結構です。ルカ伝の方から見えますと、

「一週の初めの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、内に入りたるに主イエスの屍体を見ず、これが為に狼狽えおりにしに、視よ、輝ける衣をきたる二人の人その傍らに立てり。女たち懼れて面を地に伏せれば、その二人の者いふ『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、彼はここに在らず、甦り給えり』（ルカ

24・1〜6）

ここに事態の断絶があります。イエス様は十字架で無残な死を遂げられ、そして、我々は胸を打ちながら、イエス様をお墓に葬った。今日は三日め、昨日は安息日。何もしてはならない安息日がとけたこの朝、女たちは、早く香料を携えてイエス様のお身体に香油を塗って本当にその死を悼み感謝しましょうと。ずっと連続なのです。それで、墓に來たのです。そうしたら、死体がないではないか、墓石が除けられているではないか。死体が見当たらないのみならず、輝く衣を着た二人の人が頭部の方と足の方と立っています。ルカ伝では、

「輝ける衣を着たる二人の人その傍らに立てり」

とあります。こはいかにと思えば、

「御使は言った『どうして死んだ者の中に生けるお方を探すか』」

と。この場所で、どうして死んだ者の中に生けるお方を探しておるのかと。私たちのこの生活の延長線上にある連続の生活というのは、どうもこの死んだ者たちの部類なのです。その中に何か新しいものを探そう、何とかしようと思っても、生けるお方は別のところに、断絶の次元にいらつしやいます。

「目を向けるところを変えなさい。ずっと平面で見えていないで天を見なさい。そこから光が射してくる。上から光は下って来る。しかもその光はあなたの中へ宿る。そうしたら、断絶の事態が起きる」

と。こういうことを、このみことばは我々に教えてくれていると思うのです。

夜の彼方に必ず朝が来る。どんなに闇が深くても、いや、深くなればなるほど、本当の夜明けは近い。夜明けがやって来る、夜明けは同じ苦しみの日が続くのではなくて、全く新しい朝となつて我々に訪れる。

我々日本人も、新年というものをいつも持ちます。



「明けましておめでと〜ございます」

と、お正月になるとみんな言います。初詣をしたり、いろいろお祝いごとをしたりします。それはやはり、過去を除夜の鐘と共に洗い流したいという切なる願い、これが新年のお祭りとして定着した。けれどもその新年ももう、一月経ち二月経つとまた、古くなってしまう。また来年のお正月まで待つていなければならぬ。

ヨーロッパではあまり新年というのは祝わない。なぜかという、この復活節が本当の新年なのです。しかも、

「日々に新なり」あらた

という復活節は一つの徴ですけれども、今度、我々の日常生活の中に日毎に入り込んで来ます。これによって我々は「日々に新なり」を味わわせていただく。本当の盛んなる生き方、充実した生き方、手ごたえのある生き方です。

現実にはヨーロッパの人たちはそんな風に生きていません。向こうは復活節もお祭りになつてしまいました。もう、習慣化しています。

「向こうは向こう。こちらが本家本元だ。もうこちらで本来の姿を回復して、本当の聖書の現実を地で行く。光は東方から射すのだよ」

という、誇りを我々は持ちたいわけです。キリスト教の伝統は向こうにあるかも知れない。けれども伝統にあぐらをかいていたらだめです。ずぶの素人の我々に、路傍の石のようなところにキリストの生命が植えつけられて、素晴らしい変貌を遂げる。「我々、一人ひとりを見て下さい」という思いがいたします。

●三日めに甦る

「『彼はここに在いまさず、甦り給えり。尚なほガリラヤに居給えるとき、いかに語り給いしかを憶い出でよ。即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付わたされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦るべし」と言い給えり』」（ルカ24・6〜7）

キリストはこの三日めに甦るという事態の前に必ず、罪ある人の手に渡され、十字架に付けられる。この

「罪ある人の手に渡され、十字架に付けられ、かつ三日めに甦る」

これが一セットなのです。どれかの部分だけ信じようではだめなのです。「十字架につけられなかつた」これは、私は認める。しかし「三日めに甦る」これは、私は信じない。これではだめなのです。この三つ、

「必ず罪ある人に渡され、十字架に付けられ、かつ三日めに甦るべし」

は、そうならないではいられない。これを主は繰り返し弟子たちにおっしゃったわけです。この女性たちはこのことを思い出して、十一弟子たちのところに戻りまして、かくかくしかじかと言いました。この朝、お墓を訪ねた女たちの名前が出ています。この女たちは



マグダラのマリヤ、ヨハナ及びヤコブの母マリヤ、三人の女性です。それから、彼らと共に在りし他の女たち、何人かの女性たちもありました。このような女性たちが証人として、十一弟子たちにこのことを語り伝えました。ところが、

「使徒たちはその言葉を^{たわごと}妄語^{たわごと}と信ぜず」

と、実にありがたいことが書いてありますね。この女性たちはキリストの身の回りのお世話をしていた方々です。弟子として修練を受けているわけではない。弟子として修練も受けていない。弟子たちからみたら、たいした存在ではない。その人たちが真剣に語っている。使徒たちの言葉を受けている。心に信じています。ところが、肝心要の使徒たちは、「これは^{たわごと}妄語^{たわごと}と信ぜず」という。

だから、さきほど私は、ヨーロッパのキリスト教会が復活のことをどれだけ真剣に信じているのか、どれだけ真剣に受けとっているのか、どれだけ真剣にそれを実生活で生きているのか、疑わしいと言いました。ちょうどこの使徒たちと同じ次元に落ちてきている。レッテルでは、キリスト教徒ですが、「妄語と信ぜず」という状態にいつしか引きずり込まれていました。かえって我々みたいな素人が本当に真剣にこのみことばを受けとって、それを地で行こうとしています。だから、福音はありがたいわけです。

ペテロは立ち上がって、これは一番弟子ですから、墓に行つて事実を事実として確認して帰つて来ました。

「怪しみつつ帰れり」

と。「不思議なことがあるものだなあ、しかしなあ」などと思ひながら帰つてきたわけです。これがルカ伝の復活の記事です。

●「マリヤよ」「ラボニー」

それから、ヨハネ伝の方へいきますと、少し角度が違います。ヨハネ伝20章を見ますと、まずマグダラのマリヤが一番先に墓に行つた。石が取りのけてあつた。これは大変だというところですぐ引き返しました。そして、ペテロ、ヨハネという弟子たちに、

「主さまの御体^{みからだ}がない。誰かが盗んだ。香油を塗ろうと思つてみんなでこれから出かけようとしたところが肝心の御体がない」

と。だから、恐らく想像しますに、マリヤはいたたまれなくなつてまず墓に行つた。主さまの墓を確かめてから、他の女たちと一緒に夜が明けてから香油を塗りに行こうとしていた。私の想像ですよ。まずは偵察に行つて来た。そうしたらもう、御体がない。それで、びっくりして帰つて来てペテロたちに言つた。そして、今度は、

「ペテロとヨハネと二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、かがみて布の置きたるを見れど、内には入らず。シモン・ペテロ^{おくきた}後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、また首^{こうべ}を包みし手拭は布とと



もに在らず、他のところに巻きてあるを見る。先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦り給うべきことを未だ悟らざりしなり。ついに二人の弟子おのが家にかえれり」(ヨハネ20・3～10)

誰か墓より主を取り去れりというのは本当らしいと、結果として復活を信じないで事実だけを見てそのまま帰って行きました。ところが、マリヤはもう一度やって来まして、ペテロたちより遅れてやって来まして、墓の外に立つてペテロたちのようにあつさりと帰りませんでした。そんなにあつさり、ああそうかと言って帰れるようなものじゃない。主イエス・キリストへの慕わしさに立つて泣いていました。そして、

「泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、イエスの屍体しかばねの置かれし処に白き衣をきたる二人の御使みつかい、首の方にひとり、足の方にひとり坐こうべしいたり。而してマリヤに言う『女よ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取り去れり、何処いずこに置きしか我しらず』(ヨハネ20・11～13)

こんなふうに御使に語りかけました。そして、後をふつと振り返って見たら、イエスが立つておられるではないか。しかし、それは、イエスとは分からない。どなたか一人が立つておられる。

「されどイエスたるを知らず。イエス言い給う『女よ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』。マリヤは園守そのもりならんと思ひて言う『君よ、汝もし彼を取り去りしならば、何処に置きしかを告げよ、我引き取るべし』。イエス『マリヤよ』と言ひ給う。

マリヤ振返りて『ラボニ(師よ)』と言う」(ヨハネ20・14～16)

イエスとは分からなかった。イエスの方から声をかけられた。マリヤは園守そのもりと思つて、「もしあなたが主イエス様をどこか別の所にお移しになったのだったら、どこに置いて下さったのかおっしゃって下さい、私が引き取りとうございます」

と、やはり、マリヤはどこまでも主イエス様の屍、それに何とか香油を塗ってお慰めして自分もその痛みにあずかりたいという思いでいっぱいなのです。イエスが

「マリヤよ」

と呼びかけたこの御声。さきほどは「女よ」とおっしゃった。「マリヤよ」との呼びかけで、「あつ、これは主さまだ」と思つて、

「先生!」

と言つて思わず振り返つた。そしたら、「私に触るでない」と。マリヤは抱きつきたかつたのでしょね。

「『我に触るな、我いまだ父の許もとに昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」と言え』(ヨハネ20・17)



『これから父の御許に昇って行かれる復活のイエス様にお会いした』と、弟子たちに告げなさい」

と。そこでマグダラのマリヤは帰って、弟子たちに

「我は主を見たり、しかじかのことをおっしゃった」

と告げた。その後のことは書いてありません。夕方のことしか、出てきません。弟子たちがどんな反応を示したかはヨハネ伝には書いてありません。恐らく、たわごと妄語と思つて信じなかったのでしょうか。

ですから、ルカ伝とヨハネ伝とは記事が食い違っていますし、また、ヨハネ伝はヨハネ伝独特の表し方をしますので、時間的にどうであつたということは詮索する必要はない。二つのことが我々に指し示してくれていることを受けとるべきなのです。どちらも弟子たち、本命である弟子たちはその主を受けとることができなかった。かえつて、ルカ伝では、女たちに天使が告知しましたし、このヨハネ伝では、女たちという複数でなくてマグダラのマリヤという一人の主を慕つて止まないこの女性に主ご自身が現れて、呼びかけて「私だよ」と、一言つておられる。マリヤも主が復活していらつしやるなんて夢にも思っていない。マリヤは一生懸命にただ、主の御遺体を探し当てて香油を塗ろうという、ずっと一昨日からの延長線上で考えていて、まさか復活なさっているなんてことは思っていない。ですから、そこに人の思いというのは、いかに連続の中に常に囚われているかということが分かります。自分でそれを早く払い切つて、新しい事態をそこに迎えるということは、自分の側からはできない。

しかし、このマリヤは本当に主を慕っていますから、その主への愛に主さまの側から答えておられるのですね。「マリヤよ」と言つて、ご自分がそこに現れてこられた。主の方から現れてこられた。そして、御声をかけて下さった。これは実にありがたいですね。我々の側から自分の信仰だとか、自分の力で復活の主をつかめと言われてもできません。けれども、このマリヤに対してのように、主さまの側から「マリヤよ」と言つて現れてご自身を示して下さい。我々の側から言えば、心の底から、

「本当に主さま、復活の主さま、あなたにお会いしようございます。あなたが我が内に現れて下さい。あなたがどうぞ、ご自身を私にお示しく下さい」

という、その切なる呼びかけです。

「祈り」といいますと、何か難しいですね。どう祈つたらいいのですか。「主さま！」と呼びかけること——呼びかけはみんなしています、「お母ちゃん」とか、「お父さん」とか、自分の愛する人の名を呼びます——「主さまー！」と呼ぶこと。主さまはまた、「マリヤよ」と、こう呼んでおられます。我々は、「主さま」と呼ぶことはできません。「主さま」とその呼ぶ声に主は答えて下さり、呼びかける以上に主の方からご自身を現して下さい。



●トマスに現れて下さったキリスト

それで、弟子たちはこのように、初めは主にお会いできなかった。けれどもこのヨハネ伝20章では、この日の夕方に主が現れて下さっています。

「この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて、居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』。斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、我もまたなんじらを遣わす』。斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊をうけよ。汝ら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』（ヨハネ20・19～23）

復活の主が聖霊を下さり、それから、

「私はおまえたちをこの世に遣わす。これからはあなたが私に代わって神様の働きを継続していくのだ」

と。罪を許したり罪を宣言したりということは、神様しかできないことなのです。しかし、ここで、

「汝ら誰の罪を赦すとも其の罪赦され、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし」

とあるのは、弟子たちが偉くなるわけではありません。主さまが弟子たちに乗り移って、

「おまえたちを通して罪を宣言し、罪を赦して神の御業を続行していく。そのためには聖霊を受けよ」

と。事実、弟子たちにキリストはその後、四十日ばかり地上に幾たびか現れなざって、それから、天に昇って行かれた。天に昇って行かれるそのときに、

「おまえたちはこののち祈っていないさい。そうすれば、時満ちて、聖霊が天から下ってくるから」

とおっしゃった。十日間祈り続けてペンテコステの時に聖霊が天から下って来ました。そのことを先どりしてここで言っているわけですね、

「聖霊を受けよ」

と。

イエスが来て下さったとき、その場に居合わせなかった十二弟子の一人にトマスがいた。そのことを弟子たちはトマスに言ったのでしよう。だから、

「そんなもの信じるものか。俺が現実の主さまの釘痕を見、現実指を脇に差し入れ、確認しなければ、本当に体験しなければ信じない。おまえたちみたいに、そんないいかげんな信仰ではない。私は本当に自分で確かめたら信じる」

と、トマスは弟子たちに反抗しました。このトマスはどうなったかと言いますと、



「八日のち弟子たちまた家におり、トマスも偕ともに居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』。またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、なんじの手を伸べて、我が脅わきにさし入れよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ』。トマス答えて言う『我が主よ、我が神よ』。イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』」（ヨハネ20・26～29）

一週間前にトマスが他の弟子たちにうそぶいたことをきちんと主は聞いておられた。そして、

「あなたの望むようにしてごらん」

と。もうトマスは本当に申しわけなくて、

「我が主よ、我が神よ」

と言ってその場にひれ伏してしまいました、降参しました。神様の世界、イエス様の世界は、こういうドラマチックな世界なのです。見るも可なり、見ざるも可なり。

「本当に自分は触つてみないと承知しない」

と言っている者には、

「さあ、触つてごらん」

と、主はおっしゃっているのです。お前は不信仰だからお前なんかはもう弟子ではないとおっしゃっていない。トマスはトマスで真剣なんですね。一週間の間、トマスはどんな思いでいたのか、我々には想像もできませんが、一週間後に真剣な願いにちゃんと主のほうから、トマスのために再び現れて下さった。他の弟子のためには現れる必要はない。トマスのために再び現れて、

「さあ、お前の願い通りにしてごらん」

と。こういう記事を見ますと、本当に私は何か、暖かいものに包まれている感じがする。

「信仰だの不信仰だの、そんなことは問題にしないで良い。私は信ずる、いや私は信じないと議論する必要はない。そんなものではない」

と。主さまの方から現れて、

「私だよ、マリヤよ」

と呼びかけて下さる。

「先生！」

と言って抱きつく。そういう本当に、

「暖かい、包み包まれる世界におまえたちは生きるんだよ。見たって良いじゃないか、見なくたって良いじゃないか。私は生きているじゃないか」

と、そう言って主は我々に語っておられるのですね。

我々はこの十二弟子たちのようには主を肉眼では見ません。見ませんが、この記事



があることでもう十分です。

「トマス、ようやくくれた。よく言ってくれた。私たちの気持ちをあなたは代弁してくれたね」

と、トマスに拍手を送りたいような気がする。マリヤのように慕ってやまない者に現れていただいた。また、弟子たちのように疑ってたわごと妄語と思っている者にも主は現れて、

「平安汝らに在れ」

と言って下さった。不幸にしてその場に居合わせることができなくてその場から外れていた者にもなお、

「あなたは本当に信じたいんだね。さあ、どうだ」

と言って一週間後に現れて下さっている。もし、トマスが、

「私は無関心なんだ。そんなことはもうどうでもいい。私はもう自分の古い生活に帰る。故郷に帰る」

と言って帰って行ったら、これはどうだったか分かりません。トマスは真剣なんです。

「信じたい、一生懸命信じたい、しかし、自分で確信が持てない。なんとかして欲しいんだよ」

と、そういう思いがトマスのこの言葉に現れています。そういう願いに主はちゃんと答えて下さった。無理がないです、本当に無理がない。力みかえってなんとか信じようという、そんな世界じゃないです。

●エマオ途上のキリスト

それからルカ伝では、今度はエマオの弟子たちのことがでできます。ルカ伝では弟子たちに現れて下さった現れ方がヨハネ伝とは違っています。女たちは御使の言ったことだけを信じて、それを弟子たちに告げた。弟子たちはそれは妄語たわごとと思つて信じなかった。それで、その朝のことは終わっている。そして、

「視よ、この日、二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオと

いう村に往きつつ、凡て有りしことどもを互に語りあう。語り、かつ論じあ

う程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。されど彼らの目遮さえられてイエ

スたるを認むる能わず」（ルカ24・13～16）

どうしてこの二人の弟子はエルサレムより離れてエマオの方に旅立って行つたのか、それは書かれてありません。そして、二人の弟子は十二弟子にも入っていないような弟子です。エマオという村へ旅立って行つた。道すがらいろいろ、三日前のことを語り合っていたわけです。御遍路さんは同行二人といえますね。一人で巡礼の旅を続けているのだけれど、そこにいつしか一緒にいて下さる方がある。その方に守られながら、ずっと巡礼の旅を続けるという日本の八十八ヶ所巡りという旅です。ここでは、二人の弟子たちが旅をしてい



るその道すがら、イエスの方から近づいて来て、第三のお方がそこに立つておられる。

『**されど、彼らの目は遮られてイエスであることが分からなかった**』

という。特にご復活の主さまの世界はこういうことなのです。

今、仮にこの会場の中のお一人の方が、イエスがここに立つておられるのを見たといいます。しかし、それはその人に見えるのであって、他の者には見えない。そういう事態なのです。だから、さつきマリヤが振り返ったら、主が立つておられましたね。これはマリヤにだけ見えたのかも知れません。他の者には見えなかったかも知れない。

我々のこの三次元と異なる次元の世界なのです。それが我々の中に切り込んできているのです。それにふさわしく目の開かれた人にはそれが見える、目が開かれていなければそれが見えない。それで、この時は、旅人の姿で来られた。その旅人という姿を見たのだけれども、主さまだということは見ていない。

『イエス彼らに言い給う、『歩みつつ互いに語ることは何ですか』。『あなたはエルサレムにお宿りになっていながら、都で起こっていたあの事態をご存じないのですか。大変なさわざでしたよ』。『一体何かね』。二人の弟子は、『ナザレのイエスのことです。このお方は神様と総ての民の前で、業にも言葉にも力のある預言者でありましたのに、祭司長ら及び我が司らは死罪に定めんとて之を付し、遂に十字架につけました。私たちはこの方こそイスラエルの希望の星だと、イスラエルを救い給う方だと望みをもっていました』。

神の民であるイスラエルを、ローマの支配下に呻吟している屈辱から贖いだして、イスラエルをダビデ王国のように回復して下さるお方は、このイエスだと。

『しかも今日は三日め、我々はこのお方が殺されたという事態で悲しんでいますのに、実は屍がない。そして、甦えったなどと言っている人がいる。一体これはどういうことなのでしょう』。『おまえたちは一体、主イエスから何を聞いていたんだ、主はおっしゃったじゃないか。メシヤなるキリストは必ず、これらの十字架の死という苦しみを受けた後、栄光の御姿にご復活なさる、そのように預言者たちが預言していたではないか』。かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。ついにエマオの村にやって来ました。けれどもイエスは立ち止まろうとなさらない、ずんずんと進んで行かれる。弟子たちは止めました。『もう、日暮れに近付いております、我々はこのエマオに泊りますので、どうぞ、あなたも一緒に泊って下さい』。『じゃあ、そうしようか』ということで夕食の席につきました。そのときこの旅人がパンを取りて祝し、裂きて与え給えば、

普通の旅人ではなかったのですね。そのパンを取ってお祈りなさり、裂いて弟子たちに与え給うた。



そのお姿が主イエスと全く同じでありました。そのことで彼らははっとしました。その瞬間にイエスは見えなくなり給う、お姿は消えてなくなっていた。」（ルカ伝24・13〜31）

マリヤは「マリヤよ」という呼びかけの御声に、主さまだと気がつきました。この二人の弟子は主のなさる仕草で、主さまだと気がついた。

「彼ら互いに言う『途^{みち}にて我らと語り、我らに聖書を説明^{とぎあか}し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』」（ルカ24・32）

と。

「そうだよ、あの方が我々に語りかけて聖書を説き明かしてくれた時、私たちは本当に内側が熱くなった。こんな体験は初めてだ。あつそうだ、これは復活の主さまだった。そして現にパンをお裂きになってイエス様と思ったら、御姿がなかった。我々は幻を見ていたのか、何を見ていたのか」

と。そういうことですね。彼らはエマオの村から即刻引き返しました。

「十二弟子及び之と偕^{とも}なる者集まり居て言う『主は実に甦りて、シモンに現れ給えり』」（ルカ24・33）

シモン・ペテロにその日、別のところで現れたらしいと、そんなことが話題になっています。この二人の弟子はその仲間に加わって、「実は私たちもこんなことがあつたんだ」と言つて、イエス様に会つたことを言いました。そんなことを語っているうちに、そこにイエスがお立ちになった。

「此等のことを語るほどに、イエスその中に立ち『平安汝らに在れ』』と言い給う。彼ら怖^{おそ}じ懼^{おそ}れて見る所のものを靈^{ゆうれい}ならんと思ひしに、イエス言い給う『汝ら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたがい}おこるか、我が手我が足を見よ、これ我なり。我を撫^なでて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』。かく言いて手と足を示し給う。彼ら歡喜の余りに信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此処に何か食物あるか』。彼ら炙^{あぶ}りたる魚一片を捧げたれば、之を取り、その前にて食し給えり。』（ルカ24・36〜43）

ここに靈の体、イエス様の不思議な体が現われた。彼らは肉眼で見た時は靈のように思つた。幽霊かと思つた。幽霊ではない。骨もあれば肉もある。肉体ではないけれども、靈の体には骨があり、きちんと体が整っている。手と足をお示しになった。そして、お魚までお食べになった。お魚を食べられて、それがすぐ靈化してしまうのですね。こういう不思議な姿で弟子たちにご自身を現された。我々の想像を絶した世界がここに展開している。

●「死」は死ではない

我々の理性は主のご復活、そんなことはとても信じられない。しかしながら、神様の側



からこのようにしてご自身を現して、

「これが本当の世界だよ。目未だ見ず耳未だ聞かざることが起こっている。新しい事態が起こっているよ」

と、そのことを我々の前に示して下さっているのです。これをそのまま、

「はい、本当にいただきます」

と言つて受けとる者は、同じ次元に入れていただける。それをたわごとと思つて拒む人は、それで終わりです。我々が相変わらず古い世界に執着して、その中に今日も明日もその次の日も変わりなく、新しいことなくその中で生きていくのか。それとも日ごとに新たにされて、新しい生命に変貌されつつ生きていくのか。これですよね。

我々はいろいろなことにぶつかります。いろんな試練にぶつかったり、悲しいことにぶつかったり、つらいことにぶつかったり、本当に時には死にたいと言つて自ら生命を断つ人すらあります。その人を責めることはできない。けれども、主は、

「どうしてお前の世界の中だけで解決しようとするんだ。どうして死せる者の中に解決を求めようとするんだ。キリストの別次元の生命の世界がここに差し出されているではないか。神様の側から下つて来て指し示して、『この中に生きよ』と言つて呼びかけておられるじゃないか。そこに身を委ねてごらん。そうしたらお前は、新しい生命に変貌し、新しい世界を生きていくのだよ。これをお前は本当に受けとるかね。」

と。私はそれを本当にありがたく受けとつています。もう、受けとりたいです。

我々はよく絶望ということを言います。

「万事窮す。もうどうにもならない。もう力も尽き果てた。望みはなくなつた。絶望の果ては死、死あるのみ。こういう生命を承らえても仕方がない。終止符を打とう」

と、死を選ぶ。地上の生命は死で終わりましたようにとも、我々の住む世界はそれで終わらないのです。霊界というものがあります。

霊界は神様の光輝く霊と、神に敵対する悪しき霊と、この狭間に我々は彷徨^{さまよ}っているわけです。ある時は神様の霊に包まれて非常に平安で輝いている。ところがしばらく経つてみると、別人のごとく、どこか墓場から出てきたみたいな姿であることだつてある。我々はその狭間で行ったり来たりしているような存在ですよ。

我々がどんなにいろいろなことをやりましたが、自分で死を選ばなくても、やがてやってくる死、これが一切を否定してしまふ。一切を徒勞にしてしまふ。この力から脱却できない。この世の中でこれだけは確かというものは何もないのですね、これだけは確かというものは何もない。

そのことを本当に突き詰めて考えますと、これは今度は死が我々に絶望を告知します。



浮かれている人たちに対して、

「愚者よ、お前を待っているのは死ではないか。今、喜んでいるのは、はかない喜びをしているだけだ」

と。無知なのです。

「人生の実相を直視してごらん、それは死という否定の力が全部をたたき潰すのだ、お前は一時浮かれているだけだ、けっこんな御身分だよ」

と言ってあざ笑っている。それを本当に見抜いた人は嘲笑的に、

「もうそこでまともな生き方をしたくない。馬鹿馬鹿しい。何を言っても放つといてくれ」

と、そういう生き方をしています。もう一つの生き方は、

「所詮、死であるならば精いっぱい今の世を生きよう。死は避けられないとしても、こういう強い生き方もありますよ。死が避けられないとしても、精いっぱい残っている生を生きよう」

と。あるいは総てに無頓着になる。死は総て否定だと十分知った上で、

「死によつて左右されない本当の不動心、それをもつて死であろうが生であろうが一切の執着を断ち切つて淡々と生きよう」

と。これが悟りかも知れませんが。悟りというのは一切の望みをもう持たないということです。

「お金に執着するから苦しむ。お金は捨てます。子供に執着するから、失うまいと思うから苦しい。子供はないものと思ひなさい。生命も死で無くなるのだから、ないものと思ひなさい。総ては無なんだ。だから、一切の執着を捨てなさい。では、どうしたらいいのか。出家しなさい」

と。そういうふうにならうのほうが先回りして、総ての執着を捨ててしまつて淡々と生きる。これが悟りの世界でしょうね。

そういう生き方が、本当に絶望をそのまま受けとつて絶望者として生きるか。それから、真ん中の立派な生き方は、

「与えられた短い生を精いっぱい誰かの為に一生懸命やるぞ」

と言つて燃えて生きる。しかし、それは絶望しかありません。他者もいつか死ぬのだ、死ぬ奴に尽くして何になるのだと言つて嘲笑するでしょう。

「お前はそれで自己満足しているかも知れないが、尽くされている奴かてみんな死ぬのだ。それを何も解決せずして一時的に他者を喜ばせても、自己満足ではないか」

と。そういう悟り型、絶望型、奉仕型、幾つかのパターンはありましようとも、どれだつて本当の生命の溢れるような世界ではない。

「死というものは終局のものだ」

という大前提を動かしていないのです。それが我々の紛れもない現実です。その紛れもな



い現実、

「そうじゃないよ、死は死でないよ」

と、こう言って現れて来たのがキリストなのです。他の人生観は仏教も含めて全部、死というものを大前提にしている。これは動かすべからざるもの。人間がこれに反逆するのは身の程知らず。これを前提にした上で悟るか、絶望するか、他者のために生きるか、選び取っていく。それが人間の決断です。

ところが、キリストはそんな難しいことはおっしゃらない。

「死は死ではないよ、修行して悟ることはいらぬ。絶望するのは馬鹿馬鹿しいよ、私を見てごらん、我は生きて在り」

と。理屈ではない。現実だよと。

「死がまぎれもない現実なら、もっとそれ以上に本当の生命が私にあるのだよ、生命だよ」

と言って、死をあざ笑っているのがキリストの世界なのです。

「悟りでも何でもない。これは本当だよ。死は100%、どの人も認める。そうしたら、私の生命を100%認めたらどうなるのか、私はそうなのだよ」

と。ただ如何せん、それは肉体の生命でなく霊体の生命です。だから、お魚を食べたり、

「さあ見てごらん、本当なのだよ」

と言って見せたり、主さまの方が一生懸命になっておられるのです。

●主と共に十字架された

少し福音書の前の方にいってみます。三つの福音書で受難の告知をなさったところ、そしてそれに引き続き数日後に、山上で変貌なさったところを取り上げてみたいと思います。

「イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問いて言いたもう

『人々は人の子を誰と言うか』。彼等いう『或人はバプテスマのヨハネ、或人

はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』。彼らに言いたもう『汝らは

我を誰と言うか』。シモン・ペテロ答えて言う『なんじはキリスト、活ける神

の子なり』。イエス答えて言い給う『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に

之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり』（マタイ16・13～17）

父なる神の霊がペテロをしてこの告白をなさしめ給う。「血肉でない」ということは理性でない。生まれながらの人間の理解、そのようなものでこの告白はできない。これは神様の霊がお示しになった。だから、彼は一番弟子として教会の元祖となるわけです。

「イエスご自身がキリストであるということに誰にも告げるなど、弟子たちを戒め給うた。そしてこの告白の時から、イエス・キリストは弟子たちに御自分エルサレムに行つて、長老、祭司長、学者たちから多くの苦難を受け、



そして殺され、三日めに甦るべきことを示し始めたのです。」（マタイ16・20）
21)

さつきと同じですね。このことをこの時から、弟子たちに示された。イエスがメシヤである。神から遣わされた救い主で、誰にもまだ示されていない。ペテロが神の霊に示されて告白をした。その時から、

「実はそのメシヤは苦しみを受け、そして甦るという運命の中にあるのだ」

という受けとりがたいことをそこでおっしゃった。それをペテロは受けとれませんでしたので、

「そんなことがあつてはなりません」

と言つて、キリストを戒めたのです。けれどもキリストはそれを退けた、

「これは父の御旨だ、神様の御意がここにある」

と。弟子としてのペテロの思いは、先生にこんな目にあつていただきたくない。そんなことは絶対にあつてはいけない。しかし、御意はそうではないと。

「ここにイエス弟子たちに言いたもう『人もし我に従い来らんと**きた**思わば、己を

すて、己が十字架を負いて、我に従え』」（マタイ16・24）

さあ、大変なことになりました。

「キリストに弟子入りしようと思つたら、自分を捨ててかかりなさい、自分の十字架を負つて来なさい」

という。ここに「己が十字架を負いて」とあります。そして、皆さんも、「これは自分が負わされている十字架です、この問題がいつも自分を苦しめています、これは私が負うべき十字架なのです」と、そんなことをよくおっしゃいます。けれども、「自分自身」というものが十字架なんです。

「己を捨て」とありますね。

「自分自身を十字架に付けてしまいなさい」

と。なまじ自分自身が生きているから、また、苦しいものを背負つて、「私の十字架だ」といつて、そのことで苦しむ。けれども、己が十字架を負うその己自身が死んでいたら、十字架もないではありませんか。己がそこに生きているからこそ、重い十字架を負わなければならぬ。己がそこに死んでしまつていたら、もう十字架もないのですね。

だから、さつき言いましたように、苦しみから解放たれようと思つて自分で自分の生命を断つのですね、死ねば楽になると思つて。しかし、楽になりません。霊界で苦しみます。我々は、その

「己を捨て、己が十字架を負いて」というのは、

「主さまが十字架で己を捨てておられる。主さまが十字架で己を捨てて下さった。



そこに私も一緒に捨てられている。私も一緒にここで死んでいる」と、これを受けとることなのです。

「我生く、されど我にあらず。私も主さまと一緒に十字架で死にました。私の肉体は生きています、しかしもう、実は本当の私ではありません。古い私は死んで新しい復活の生命に活かされてあるのが本物の私です」

と。そういうところに今度は、連れていつていただけるのです。ですから、

「私に従って来て、一緒に生きようと思う人は自分を捨て自分の十字架を負って従いなさい」

と。ここでは、こう言っていらいっしやるけれども、これの本当の奥義は

「お前は私と一緒に十字架されて死んでしまうんだよ。もう古きお前はいなくなる。復活の新しいお前に生まれ変わる。だから、喜ぶんだよ。そのために私は長老、祭司長、学者らから苦しみられ、殺された。これは何のためか。おまえたちが受くべき神の審き、罪の値は死なりといったその罪の審き、これを全部私が受けとるんだから。私がお前に代わって死ぬんだから、お前は私と一緒に十字架に付けられているんだよ」

ということですよ。

●生命を与えるご復活

「六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。かくて彼らの前にて其の状かわり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。ペテロ差し出でてイエスに言う『主よ、我らの此処に居るは善し。御意ならば我ここに三つの庵を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの為にせん』。彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、彼らを覆う。また雲より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け』。弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼ること甚だし」(マタイ17・1～6)

ペテロは自分で何を言っているのか分からないのです。うわごとのようにこんなことを言っている。見るべからざる光景を見た。この三人だけなのです。特別の弟子だけがイエスと同行を許されて山に登って行つた。そこでイエスが祈つておられると、眩い姿に変わられた。そして、天界からモーセとエリヤが降りて来た。そこは靈界に変わってしまった。絶対界がそこに現れてきた。そしてイエスご自身が変貌しておられる。まばゆい姿に変わっておられる。光の雲に覆われている。この情景に弟子たちは本当に恐れて倒れ伏した。がたがた震えていたといつていいでしょうね。イエスはその倒れている弟子のところに来て



触って、

「起きなさい」

とおっしゃった。

「彼ら目を挙げしにイエスの他は誰も見えざりき」

と。主はここではっきりと復活のお姿を三人の弟子たちに示されたわけです。主ご自身はこのように、祈れば変貌して、天に昇って行けるお方です。同じ場面が三つの福音書にできます。天からの声は

「我が愛しむ子、我が悦ぶ者」

と、これがマタイ伝です。マルコ伝では

「我が愛しむ子なり」

と。ルカ伝では、

「我が選びたる子なり」

と書かれています。その三つの福音書に共通していることは、

「あなた方はこのお方に聞きなさい。このお方のおっしゃることをしかと受けとりなさい。」

と。そういう言葉は共通です。だから、私はこの変貌の場面は福音書の中でも極めて大事なところだと思います。

この後、何日か後に主は十字架におかかりになる。しかし、これをはっきりと弟子たちに示されたということは、主が復活されてからこの場面が弟子たちの心の中に蘇よみがえっているのですが、主イエスというお方は死ぬべきお方ではない。本当に祈っておられるとこのように変貌して天に昇って行ってしまわれるほどのお方です。そのお方がこともあろうに、あの長老たちに苦しめられ、十字架につけられ、殺されるという正反対のお姿になられるということとは、そこに我々の受くべき死——それは罪の支払う値としての死——これを全部ご自身で引き受けておられる、まさに主の愛の御業みわざなのです。

しかもそれは父の御旨みむねである。ゲッセマネの祈りで本当に主は祈られた。

「それしかないのですか、他に彼らを救う道はないのですか」

ということを、苦しみ悶えて祈られた。けれども神様からの答えは

「そうだよ」

というお答えしか返ってこなかった。そこで主は敢然と立ち上がって十字架に向かわれた。ですから、主のご復活ということと、この十字架の死、これは切り離すことができないのです。十字架の死が必然であれば、また、ご復活も必然です。しかもそのご復活は、ご自身の生命の永遠性を表すだけではなく、我々にそれを別ち与える、我々もそれにあずかるというご復活なんです。我々の受くべき死、審き、それを主が十字架で引き受けていて下さる。そしてご復活の生命が現れた。



「それはお前たちのためだよ」
と言って差し出して下さいます。

●聖霊

『父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣わし給いし父をも敬わぬなり。誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来たり、耐して聞く人は活くべし。これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、また人の子たるに因りて、審判する権を与え給いしなり。汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。善をなしし者は生命に甦り、悪を行いし者は審判に甦るべし』（ヨハネ5・21～29）

「私の言葉を本当に受けとるならば、その人はもう、永遠の生命者だ。私がそれを引き受けているのだから、十字架の審きはパスである。だから、私の言葉を受けとる者は即、永遠の生命だよ」

と。それから、

『父の我に賜うものは皆我に来らん、我にきたる者は、我これを退けず。それわが天より降りしは、我が意をなさん為にあらず、我を遣わし給いし者の御意をなさん為なり』（ヨハネ6・37～38）

キリストが天界から降つてこの地上にイエスとなつてお生まれになった。物心ついて神様の霊を受けて、伝道を始められたのは30才近くですけれども、その伝道の自覚は常に、ここにありますように、自分の思いのままをやることではない。

「父の御意をなさんため」

ただこれだけです。キリストを動かしているのは父の御意、これだけであります。その御意の中心はどこにあるかというと、

『我を遣わし給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終の日に甦らす是なり。わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦らすべし』（ヨハネ

伝6・39～40）

この「終の日」は今、成就していると申し上げたい。

「今こそ終の日なり」



と私は申し上げたい。今こうして福音の言葉を聞いているその時が「終の日」なのです。我々は見える形、主の変貌のような姿では甦りません。その質はこういうみことばを聞きながら、私は主の甦りの生命を、今、現に戴いております。私のこの肉体の奥に、甦りの主のご復活の霊体もう来ています。「それでは、あんたは二重人格か」と。

「はい、二重人格です。肉体としての我はここにありますが。しかし、その奥にキリストの霊体がすでに形づくられてある。古き我は日毎に死んでいます。新しき我は日毎に新なのです」
あらた

と。そういう告白、これをもって私は生きています。それは私がこのみことばを100%に受けし、この中に生きようとしているからなのです。

「まことに誠に汝らに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。我は生命のパンなり」(ヨハネ6・47、48)

という。昔、先祖たちがモーセから戴いたパン、天から降ってきたマナ、これを食べたけれど結局は死にました。しかしながら、

「私という天から降った生ける生命のパン、私を食らう者は——私を信じ、体の中に受けとって日々食らっている者、呼吸している者は——死なないんだよ」と。

「活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。天より降りしパンは、先祖たちが食いて、なお死にし如

きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん」(ヨハネ6・57、58)

このように、キリストは、ご復活の姿を、ちゃんと語っておられる。ご復活は、すでに語っておられることの実証にすぎないのです。だから、イエスは弟子たちに

「あのように私が生前、語っておいたことをどうして信じられないのだ。ああ、心鈍き者よ、お前たちの心にベールがかかっている。語っておいたことがみんな眠っている」

と言つて責めておられます。それは仕方がない。眠っているみことばが甦るのは聖霊による。聖霊が来て初めてみことばが甦るのです。弟子たちがこんなに詳しく活々と福音書を書くことができたのは聖霊が来たからです。聖霊が来て初めて、過去のこと全部復活してきた。そして今、展開しているように弟子たちの中に甦ってきた。だから、彼らは書いたのです。

●毎日が新生

この福音書を通して主さまが、

「この骨を見よ、肉を見よ、私の体を見よ」

と言つて、何か迫っておられるように聖書自身が呻いている。私たちに何とか本当の世界を伝えたい、本当の世界を差し出してその中に皆さんを活かしたいと、聖書自身が呻い



ているのです。余りにも従来の、「死で終わり」という觀念が、何世紀も何百世紀も人間を支配し続けていましたが、それを打ち破って新しい事態がここに起きている。

もう、古きは過ぎ去った、暗き闇は去った、光が射してきた。その復活の朝、それが私たちを包んで下さっています。私たちは本当にそれを一人ひとりが受けとってその生命に変貌して生きる、輝いて生きる、そのことを聖書はずっと訴え続けているのです。

あれから、二千年経ちました。人々がどれだけ信じたか知りません。それでも性懲りもなく、復活のキリストは我々に、

「見ずして信ずる者は幸福なり」

と言って呼びかけて下さっているのです。私はもう無条件に、

「主さま！ 全世界の人が信じなくても、『はい』と言ってる者がここにいるのですよ」

と、主さまに答える。小学校一年生の子がちょうど先生に「はい、はい」と手を挙げて、「ここにいますよ」と言っているように。我々はそういう幼子の姿。主さまは皆さん一人ひとりに「マリヤよ」と一対一でしたね。

「マリヤよ」

「はい、ラボニー」

と、それを主は一人ひとりになさっていらつしやるのです。それが復活節の日だけではない。毎日毎日がそうなのです。絶望するような瞬間、瞬間にそうなんです。

「絶望の彼方に光が射しているではないか。絶望はもう克服されてしまっているではないか。この変貌の私を見よ。見えるものに囚われたらだめだ。自分の経験に囚われたらだめだ。自分の觀念に、理性に囚われたらだめだ。常にそれをぶち破って、新しい世界が展開していくのだ。私と一緒に生きようよ」

と、そう言って呼びかけていて下さっているのが福音書なのです。そして、パウロの呼びかけなのです。

多くのクリスチャンたちが主の呼びかけに答えてきました。現に主を見た人があります。復活の主により瞬時に長年の病気を癒された人たちの証言もあります。学問的証言ではない。みんな実生活での生の体験なまを告白して、そういうものが積み重ねられているのです。ですから、復活節は燃えざるを得ない、あたかも新緑に新しい生命が燃えてくる、この自然の季節と復活節が重なり合っているのは素晴らしいと思います。

（『復活の歓喜と希望』 1993年8月1日発行より転載）

